

〈振る舞いの社会学〉を素描する

——その目標、基本概念、実践形態、研究テーマについて——

岩 永 真 治

はじめに

坂部恵著『〈ふるまい〉の詩学』（岩波書店、1997年）という本がある。タイトルに含まれている「詩学」という言葉は、おそらく古典ギリシア語の「ポイエーシス＝制作する」という動詞を意識したものであろう。あるいは、アリストテレスの『詩学』という研究書のタイトルを援用したものかもしれない。いずれにせよ、その意味するところは、本の内容から言って、人間の「ふるまい」が能などの日本に伝統的な舞台芸術（演技構成）も含めてどのような原理を普遍的に持っているのかということへの関心を示している。

本書で論じられている「ふるまい」の基本構図は、古典ギリシア語のラテン文字転写—たとえば、hexis（ならい）—によって示されている。なぜ、古典語本来のギリシア文字で書かないのか。古典ギリシア文字で示された意味とその後ラテン語化された文字に浮かびあがる解釈—とくにトマス・アクィナス以降の一とでは、視覚に入った時の意味の広がりや違ってくる。ローマ法以来の、とりわけルネッサンス（文芸復興）以降中世のヨーロッパに発展したラテン文明以降の文化の影響下にあるわれわれの現代文明においては、宗教改革以降新約聖書における古典ギリシア語からの直訳の（たとえば、カルヴァン主義やルター主義に代表されるプロテスタンティズムの）聖書文化が発達したとはいえ、ラテン語化された古典ギリシア語における意味の変質はきわめて大きい。

そこには、西欧＝国民的近代（western and national modernity）がもつ本

質的な問題が隠されている*。

*西欧=国民的近代のメルクマールのひとつに、ヴェストファーレン（ウエストファリア）条約（1648年）の成立がある。ヴェストファーレン条約体制が確立し、ヨーロッパで宗教戦争が国家間の区割り確定として終わったまさにその年に、逆にポーランド内ではウクライーナ・コサックの長フメリヌィーツィクイイによる反乱が起こっている。ポーランドにおける反宗教改革の達成およびヨーロッパにおけるカトリックとプロテスタントの新しい構図の確定は、ポーランド内部においてプロテスタントが東方正教会勢力との同盟形成に失敗して後、カトリックと東方正教会の融合であるユニエイト教会（東方典礼カトリック教会のひとつ）の誕生を生んだ。他方、1648～1653年にフメリヌィーツィクイイは、クリミア・ハン国のタタールと同盟を結んでいた。タタールの裏切りもあり、その後かれはウクライーナがオスマントルコの保護国になることを望んだ。しかし結果として、ポーランドに対抗するために1654年、ウクライーナとロシアとの間にはペレヤースラウ協定が結ばれることになった。現在、グローカリゼーションのプロセスのなかで、ヴェストファーレン条約以来のグローバルな主権国家体制の変容が議論になっているが、現在のロシア-ウクライーナ-EU（ヨーロッパ）-日本の関係の問題は、こうした歴史的な文脈のなかにある問題として考察する必要があるであろう⁽¹⁾。ちなみに、ソ連崩壊（1991年）前後からのウクライーナにおけるユニエイト教会の復活は、プレスト合同（1595～1596年）以来の流れのなかにある運動である。教義はカトリックなのに、教会内の「振る舞い」は東方正教会式の復活である。

それはちょうどウクライーナにおいて、ロシアの、ペレヤースラウ協定（1654年）による偽りの「保護国化」以降*、そしてとくにピョートル1世（1672～1725年）、エカチェリーナ2世（1729～1796年）の治世下を通じて、学校や教

会や文学におけるウクライナ語の読本がロシア語によって書き換えられていった政治プロセスにも似ている。カントの研究者であった坂部恵には、ラテン語化されたギリシア文字だけで古代ギリシア文明に触れるのには十分であったということだろうか。これは、カーニングレードからケーニヒスベルク時代の規則的で静寂なカントの散歩を夢想するだけでは、到達不可能な地平の問題である。

*ペレヤースラウ協定については前注を参照。この協定後、1686年にすでにウクライナ正教会の自治制度が廃止されている。さらに、コンスタンティノポリ総主教庁に属するキウ府主教区は、モスクワの総主教に移管された（2019年1月6日に正式にモスクワ総主教からの独立を回復している）。これ以降、ロシアのツァーリ国は、ウクライナのコザーク国家の教育機関を監視するようになった。翌1687年、ロシアのツァーリ国は、コザーク政府に対してロシア人とウクライナ人との結婚を促進（混血の推奨あるいは民族浄化）するように命令している（「コロマクの条々」を参照）⁽²⁾。さらに1689年、モスクワ総主教はキウ洞窟大修道院に対して、自由に書物を刊行することを禁止した。そしてピョートル1世はロシア皇帝として1720年、ウクライナ語で書かれた新書の出版を禁止し、ウクライナ語で書かれた古書をロシア語に書き換えるよう勅令を出したのである。

ウクライナの国民的詩人タラス・シェフチェンコは、1844年に詩集『夢』のなかで、つぎのように書いている。「あの（ピョートル）1世はわたしたちのウクライナを十字架に磔（はりつけ）にし、あの（エカチェリーナ）2世は孤児の未亡人を拷問して駄目にした（...це той первый, що розпинав нашу Україну, а вторая доконала вдову-сиротину...）」⁽³⁾ いまウラジーミル・プーチンは、軍事占領したウクライナのクリミア、ドネツィク、ルハーンシク、そして新たにメリトボル、マリウポリ、ヘルソンで同じことをしている。チャ

イコフスキーのマロロシア（「小ロシア（＝ウクライーナ）」）という曲を、私たちはいま、どのように聴くことができるだろうか。

ピョートル1世の時代は君主制であったが、その外套を被ったプーチン大統領の「振る舞い」は「僭主制（テュランニスあるいは専制政治）の振る舞い」である。その体制は、政治学的には「大統領制の装いをもった君主制」ではなく「大統領制を装う君主制の逸脱形態」である。プーチン大統領個人の「身体的な振る舞い」に焦点をあてれば、それはすでに国際的に十全なる「外的な善」を喪失しており、「身体の善」も健康で強壯であるように見えるが年齢によってすでに綻びており、「魂の善（内的な善）」に至っては知的にも倫理的にも崩壊している。ちなみに、君主制も僭主制も「単独支配者制」（モナルキア）であるが、よき君主は通常自分の被支配者（＝被施善者）たちの功益を考えているが、ウラジーミル・プーチンは自己（＝施善者）の国家に対する功益（「偉大なるソヴィエト連邦＝ロシア勢力圏の再構築」）のみを考えている。

私はこの論文で、主題である都市における「人間の振る舞い」について、古典ギリシア語の文明そのものの地点から、またさらに遡って古典古代のギリシア文明に影響を与えた古代インドのサンスクリット文明の展開とその後の日本における仏教文化におけるその残存を意識しながら、論じたいと思っている。その両方が、私が現在調査している房総半島の上総（かずさ）地域には存在しているからである。

また、350年以上にもわたるロシアによるウクライーナ語抹殺諸施策の後にも継続している今日の「ウクライーナ・ナショナリズム」運動をめぐって、非言語的で身体的かつ対環境的な、しかも「ロゴス的に一貫した振る舞い」、すなわち「ウクライーナ的なもの」の存在を意識している。この問題は、語りが少ないが心根の優しい東北の「ものいわぬ農民」の理解に関係している。また、能の舞台において、振る舞うが語りはそれほど多くない、ことにも関係し

ている。

1) 都市社会と都市研究の現在

20世紀の初頭に、都市研究古典草創期のドイツの社会学者であるマックス・ヴェーバー、ゲオルク・ジンメルや、そこで学んだりアメリカに移民をしたりしながらシカゴ学派と呼ばれる都市社会学の代表的な調査研究成果を発表したロバート・E. パーク、アーネスト・W. バージェス、ルイス・ワースなどによって、社会学、地理学、都市計画学、社会事業（民間の社会福祉活動）等の分野で都市、とりわけ大都市の研究が意識的に取り組まれるようになって100年以上が過ぎた。

ヨーロッパで社会思想の一部として18～19世紀に姿を表してきた都市研究は、イギリス経済を20世紀初頭にアメリカ合衆国が凌駕し、アングロ・サクソンのなピューリタンの小規模なコミュニティを中心に育まれていた「初期アメリカ的な経験」とはまったくちがった、「大都市」あるいは「大都市圏」の出現を眼前にするようになって、学問として飛躍的な発展を遂げた。

有名なジャーナリストであったウォルター・リップマンに「われわれが知っている世界は完全に変わってしまった」と言わしめた、当時の「都市に特有な近代生活」の象徴は、高層建築物、地下鉄、百貨店、日刊紙（新聞）、社会事業であり、同時に離婚、非行、社会不安のようないわゆる「社会問題」であった。それらを生み出しているのは、アーネスト・W. バージェスによれば、大都市の物理的な発展と拡大であった。しかしそれは、国民国家の確立と、とくに国民経済の発展（そのナショナルな好循環の確立）と強く結びついた出来事であった。

一方、今日の巨大都市（Mega City）の発展は、グローバルな経済の発展と展開に密接に関連しており、そこに完全に「埋め込まれ」ている。なかでも東

京は、1都6県を含めて世界最大のグローバル都市を構成しており、約3,911万人という巨大な人口を抱えながらも、質の高い都市空間を機能させている⁽⁴⁾。人口統計学的に言えば、ニューヨーク、ロンドン、パリが大都市の象徴であった時代はとうに過ぎ去り、いまは、たとえばパリが電車の駅を中心に街づくりを進める際に東京の手法を模倣してもいる。

以上のような時代の都市社会をわれわれは今日研究している。

2) 「都市とはなにか」という問題

しかし、依然として、中小都市であれ、大都市であれ、巨大都市圏であれ、グローバル都市であれ、われわれの前には「都市とはなにか」という問いが横たわっている。その問いに応えるにあたっては、「人間」を理解することが大事であり、「心（こころ）と身体（からだ）の状態としての都市」(the city as a disposition or state of mind and body)を理解することが大事である。この場合、都市研究の焦点は、「心と身体の状態としての都市」がどのように「習慣化」され「血肉化」されて「ある種のよい状態＝行動性向」を生成しているのかということにあり、またその「状態」が「断絶」したり「変容」したりしているのか（＝逸脱）を把握することにある。

そこでは、一方で、フィジカルな「身体の状態」(embody), 「身体化されたもの」(embodiment), 「身体化のプロセス」(embodification)が重要な問題のフェーズとしてある。他方で、「身体化されるもの」としての「心＝魂の状態」, すなわち「振る舞い」(＝行動性向, ヘクシス)の把握も重要であり、同時にそれら両方がどのように絡み合っているのかという研究も重要になってくる(bodily aspect of emotions between body and mind, hexis as the two connected)。その絡み合いには、「選択と感情の状態」という基本的な問題が横たわっている。そしてその中心には、「苦痛」(リュペー, λύπη, pain,

distress) と「快樂/快適さ」(ヘドネー, ἡδονή, pleasure/ヘーデユ, ἡδὺ, the pleasant, enjoyment) の対立と葛藤があり, 「善をめぐる競合」(moral competitions) がある。さらに, その周辺にはもっと多くの複雑な心と身体の相互関係をめぐる位相が存在している。

ちなみに, 「善をめぐる競合」とは, もしすべての人がとりわけ「うるわしき (=美しく立派な) 行動」を認め称賛し, そしてすべてが「うるわしきもの」(ト・カローン) のために競合し, まさにオリンピック競技のように「もっともうるわしき行動」(タ・カリスタ・プラッテイン, τὰ κάλλιστα πράττειν, the noblest deeds) をしようと競い合うなら, そこには必要な「公共的なもの」(ト・コイノン) が存在するようになるであろう状態を意味している。また各個人にとっては, そのことが本当の意味で固有の卓越性 (したがって固有の機能 = エルゴン) の実現を意味するのであれば, そこには「各個人における善の最大のもの」(イディア・ヘカスター・タ・メギスタ・トーン・アガトーン, ἰδίᾳ ἐκάστῳ τὰ μέγιστα τῶν ἀγαθῶν, individuals enjoy the greatest of goods) も存在する (=人間の「関係行為としての所有」が自然本来の個性における卓越性を獲得する) ような状態を意味している。

これは, かつてフランスの社会学者エミール・デュルケームが, 高度な産業社会すなわち都市型社会において実現するであろうと考えていた「有機的連帯」(ラ・ソリダリテ・オルガニク) の内実でもある。それは各人の自分自身へのよき友人的身体技法 (自己愛, self-love) が, 他者へのよき友人的身体技法 (利他主義, altruism, すなわち友人としてのよい振る舞い) にもなっているような社会状態である。

ところで, 「身体性向」すなわち「身体を介した振る舞い」(bodily hexis) には, 二つの側面がある。ひとつは, 文化的な振る舞い—行動性向 (cultural dispositions) であり, それには言語的性向 (the linguistic), 倫理・道德的性向 (the ethical or moral), 知的性向 (the intellectual), 美的・感覺的性向 (the

aesthetic) などがある。もうひとつは、生物学的な振る舞い—行動性向 (the physical and biological) であり、ミラーニューロンの共機能性向などが想定される⁽⁵⁾。ジェンダーをめぐる「心 (こころ) と身体 (からだ) の不一致」問題は、「身体性向」を構成する「文化的振る舞い—行動性向」と「生物学的振る舞い—行動性向」の不一致と矛盾を表現している。

「身体性向」としての「都市的な振る舞い (= 状態)」に関して、ここでひとつだけ事例を挙げておこう。日本人の身体性向は伝統的には“not so hectic (not hektikos = 習慣的に熱が継続し、息が途切れ途切れになっているような状態ではないもの)”であったが、時間の密度 (タイムスジュール) と人口密集によって窮屈になった山手線の「強制された身体の密度」は、文字通り“hectic”であり、ひとつの行動 = 身体性向になっている。ここには、東京のアーバニズムの特徴のひとつがあると見てよい。

シカゴ学派の都市社会学者であるロバート・E. パークは、「都市は精神 = 心の状態 (a state of mind)」であると述べた。この定義を拡げて解釈し、私はここで、都市をつぎのように最終的に定義したい。すなわち、都市とは、中庸の遵守を軸に本質的に構成され、苦痛と快楽の原則によって動機づけられる、行動と感情の選択を決定している「身体的な振る舞い」 (= 行動性向, ヘクシス), すなわち人間の卓越性/非卓越性によって社会的あるいは差別的に構造化された生活環境であり、人間の思慮が支配する原則とそこからの逸脱によって構成される「身体的な振る舞い」によって構造化された生活環境である、と。

そして、都市の研究は、究極的には「人間の選択性向」(ヘクシス・プロアイレティケー, ἕξις προαιρετική, choice disposition) の研究である。この「選択性向」によって、都市社会における「消費者選好」(consumer preferences) も表現されている。文化は、非常に多くの個人の選択の結果である。そして、「意図された選択」(προαίρεσις, choice and decision, action on a decision) は、一般に、「善さ」と「悪さ」に関係している。「意図されない選択」は、多くのば

あい、「苦痛」と「快樂」に支配されている。しかし、現在それは、第一義的には商品間の選択を通じた、社会関係の種類（あるいはライフスタイルや、その背後に潜んでいる自然観（myths of nature）と人間観（myths of persons））として選択されているのである。

さらに、文化人類学者であるメアリー・ダグラスによれば、ある文化はつねに他の文化を非難している⁽⁶⁾。彼女によれば、たとえば消費財の選択は、よく言われるように単なる「否認の行為」（acts of defiance）ではなく、もっと強力に持続的かつ支配的な「文化的敵意」（cultural hostility）を表現している。都市社会における商品の身体的な選択は、「否認、威嚇、説得の行為」になっているのである。食料品や化粧品を購入は自分の選択の御旗を上げるための「武器の購入」（buying weapons）であり、購入される机や椅子、洗剤や磨き粉は「忠誠の表徴（しるし）」（badges of allegiance）である。鍋類や菓の選択は、「主義主張の宣言」（declaring dogma）になっている。

そして、合理的かつ感情的に個人が行なう基礎的な商品の身体的選択は、都市の住民が「どのような社会に住みたいのか」についての選択にもなっているのである。このような選択にしたがって、引き続く商品の選択もおのずと決まってくる。ここには「感情理性（ロゴス）」（rational bodily affections）が作用している。それは、「感情」であると同時に「正しさ」（ト・ディカイオン）の選択でもある。自然の循環から過剰になりがちな人工的な商品群は、こうした文化的で敵対的な選択を証明するべく選ばれてくる。そこには、都市社会に住む「消費者の行動における首尾一貫性」（integrity of consumer behavior）が示されている。ともあれ、ライフスタイルをめぐる文化の選択には、「敵意のスケール」（a scale of hostility）というものが存在している。

以上のような文脈において、現代の都市とは商品の身体的な選択行為（＝選択性向, choice disposition）を通じて表現される、「文化的な敵意」に満ちた生活世界なのである。

3) 「振る舞いの社会学」が目標とするもの

「振る舞い (= 行動性向, ヘクシス) の社会学」が, その実践形態において目標にするものに関するいくつかの問題について, まず述べておきたい。

第一に, 「苦痛」と「快樂」の対立に関しては, 「楽しさ・快適さ (τὸ ἡδὺ) という原則からの逸脱」と超高齢社会に関する問題がある。

「悪の根源」は, 共産主義イデオロギーでよく語られた「金銭欲」や, また英国の作家ジェフリー・チョーサーが言っているような「金の欲」(同『カンタベリ物語』⁽⁷⁾)ではなく, 古代の哲学者アリストテレスが『ニコマコス倫理学』のなかで適切に述べているように, 「苦痛」(リュペー, λύπη, pains)である。「苦痛」から逃れるときに感じる「快樂」(ヘドネー, ἡδονή, pleasures)によって, 人間は「美しく立派な行為」(ト・カローン, το καλόν, noble and fine action, the pleasant)から「逸脱する」ことがある。

近年「触法行為」としてよく話題になる高齢者の「逸脱行為」は, 多くの場合「身体的抑制力の無さや肉体的な力の無さ」(ακρασία, the Unrestraint)から生じている。そして, それがときに「放縦, 放埒」(ακολασία, profligacy)に見えることもある。日本にみられるような「超高齢社会」について論じるとき, この点を知ることは決定的に重要である。

また, 高齢期になるとひとは, 「快適なもの」(ト・ヘーデユ, τὸ ἡδὺ, the pleasant, fine pleasure)ではなく「最も愛しいもの」(ト・オーペリモン, τὸ ὠφέλιμον, whatever one loves best, whom you desire most, otherwise, profit)を追求する傾向がある⁽⁸⁾。すなわち, プラトンが『ゴルギアス』で言っているように, 「自分自身の関心の虜(とりこ)になる」のである(“τυφλῶς ἔχειν πρὸς τὸ ὠφέλιμον”⁽⁹⁾, be blind to one's own interests)。

以上の点は, 「振る舞いの社会学」にとって重要な関心事である。

第二に、この点に関連して、「人間にとって自然本来的な〈快樂〉とは何か」という問題に「振る舞い（＝行動性向、ヘクシス）の社会学」は基本的な関心を持っている。「最高の善」（タリストン、τάριστόν, supreme goods）というのは、すでに培われている「顕在可能な力あるいは潜勢能力」（デュナミス, δύναμις, capability）を可能な限り働かせ、現実化させるところに生じる。その「楽しさ、心地よさ、快適さ、悦楽」（ト・ヘーデユ, τὸ ἡδὺ, fine pleasure）によって、人間は「美しく立派な行為」（ト・カローン, το καλόν）を行なう。そして、楽しさ＝快樂は、人間にとって個別の目標においても普遍的な目標においても、人間の活動を完成へと導く活力である。「楽しさは活動を完成させる」（τελειοῖ τὴν ἐνέργειαν ἢ ἡδονή, the pleasure perfects activity）⁽¹⁰⁾のである。

人間にとっての「楽しさ、心地よさ、快適さ、悦楽」（ト・ヘーデユ, τὸ ἡδὺ, fine pleasure）というのは、自然本来的に「潜勢能力」（デュナミス）ではなく「現実の活動」（エネルギー, ἐνέργεια, activity）をともなうものであり、その活動に即して生じるもの（付随性, the survenient*）であって、それ自体人間の「活動」（エルゴン, ἔργον, function）の「最終目標」（テロス, θέρος, finally personal and social goals）の一部である。

*石黒ひでは「認識としての感情」（哲学会編『哲学雑誌：情念と意志』第101巻773号, 1986年）という論文のなかで、survenientの語源である“supervenire”（上に生じる）というラテン語が、哲学者（たとえばG. E. ムーア）によって「倫理的性質は自然的性質に還元不可能でありながら自然的性質に齎されて立ち現れるもの（Supervenientなもの）」とされたのは、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』が中世にラテン語に訳された時のことであると述べている。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』1174b31において、上でも述べたように「快樂は活動を完全なものとするが、それは行動性向としての活動のうちに内在して

いるのではなく、活動に付随する何か目的として、活動を完全なものにするのである。たとえば、若さの華やきが盛りの年頃の者たちに添えられるように...」⁽¹¹⁾。この「快樂が活動に付随する」(ἐπιτιγνόμενόν)というところが、ラテン語では「快樂とは活動の上に生じて」(supervenit)と訳された。続けて、つぎのようにも述べている。「したがって、知性や感覚の対象が然るべき状態にあるとともに、これを判断し観想する者も然るべき状態にあるかぎり、そうした活動に快樂はあることになる。なぜなら、働き掛けられるものと働きかけるものとが、同じようなものとして、互いに同じ仕方に関わりをもつとすれば、同じものがそこに生じるものは自然なことだからである。」⁽¹²⁾反対に、快樂が持続しないのは活動が持続しないからである、とアリストテレスは言っている。

そして、それが「苦痛」や「不足」からの「回復過程(ゲネシス, γένεσις, becoming)において生じる、すなわち自然本来的ではない快樂」であることも多いが、われわれがここで言う「最終的な目標としての楽しさ、心地よさ、快適さ、悦楽」とは、ただ「自然本性(ピュシス, Φύσις, Nature)が完成に至るための過程」においてのみあてはまるものであると言ってよいだろう。

したがって、「人間にとって自然本来的な快樂」とは、「知覚された生成過程」(アイステーテ・ゲネシス, αισθητή γένεσις)⁽¹³⁾ではなく、「自然本来的な振る舞い=行動性向に従った現実的な活動」(エネルゲイア・テース・カタ・ピュシン・ヘクセオース, ἐνέργεια τῆς κατὰ φύσιν ἐξέωσις)⁽¹⁴⁾である。それは「過程や生成の感覚=知覚(アイステーシス)」ではなく、「自然本来的で滞るところのない(unimpeded)行動性向=状態(ヘクシス)」である。再度注意を喚起しておこう。ここで大事なことは、「現実の活動(エネルゲイア)の付随物」と「生成やその過程(ゲネシス)の付随物」を同一視しないことである。

ところで、「快樂」が「悪しきもの」へと導くことが多いからといって、「快樂全体を悪しきものである」と主張するのは、間違っている。それは、たとえ

ば「健康」がお金儲けのためになることがあるからと言って、「健康である事柄自体を悪しきものである」と主張するようなものだからである。

第三に、「自然本来的な〈快樂〉は〈思慮〉を阻害するか」という問題がある。

少し〈広げて〉考えてみよう。たとえば、「静かに深く考える」(テオーレイン, θεωρεῖν, contemplate) ことも、「健康」(ヒュギエイア, υγιεία, health) に対しては害を及ぼすことがある。さらに、「肉体的な快樂」(ヘドネー, ἡδονή, bodily pleasure) は「思慮」(プロネーシス, φρόνησις, prudence) を阻害すると言われることがたしかにある。しかし、「思慮」(プロネーシス) にしても、その他の「行動性向」(ヘクシス, behavioral hexis) にしても、これらを阻害するのは、「行動性向」それ自身にもとづく「快樂=心地よさ」(ヘーデユ) ではなくて、むしろ実際にはそれとは別のところから生じる「快樂」である。おそらくそれは、すでに述べたように「知覚された過程=愛着」への[・][・][・]過度の追求から生じる「快樂」(ヘドネー) であろう。

しかし、「静かに深く思考し学ぶということにおいて生じる快樂 (= 楽しさ, 心地よさ, 快適さ, 悦楽, 愉楽)」(the pleasures of contemplation and learning, 沈黙思考 (= 観想) と学びの悦び) は、しばしば、ひとをますます静かに深く思考させ、学ばせるであろう。⁽¹⁵⁾

こうして、「振る舞い (= 行動性向, ヘクシス) の社会学」が最終的に目標にするものは、「本来的な人間としての機能」にともなう「自然本来的で滞りのない (unimpeded) 行動性向=状態 (ヘクシス)」がもたらす「快樂および快適さ」(ヘーデユ, fine pleasure) なのであり、「現実の活動」(エネルゲイア, activity) や、その「完成された姿」(エンテレケイア, flourishing) が生み出す「快樂あるいは快適さ」、換言すれば「肉体的および精神的な気持ちよさ, 心地よさ」なのである。そしてこれこそが、「人間的にとっての幸福そのもの」(エウダイモニア, happiness for human being) でもある。

4) 「振る舞い (=行動性向, ヘクシス) の社会学」における基本概念の素描 (esquisse)

「ヘクシスの社会学」における基本概念

「ヘクシスの社会学」は、すでに述べたように「振る舞いあるいは行動性向の社会学」であり、また「心と身体の状態としての都市や地域を研究する社会学」である。そして、「振る舞い (=行動性向, ヘクシス) の社会学」における根本概念は、以下の通りである。

まず、「心」(プシュケー, ψυχή, psychē, mind, こころ)と「身体」(ソーマ, σῶμα, soma, body, からだ)の基本構成要素として、1)感情, 情熱 (パトス, πάθος, feeling, passion, affection), 2) 潜勢 (潜在) 能力 (デュナミス, δύναμις, capability, faculty), 3) 行動性向 (= 振る舞い, ヘクシス, ἔξις, disposition, state)がある。ここでは、身体的な統合感覚としての「身体感情」(σωματικά, bodily affections)が重要な概念である。たとえば、ウクライーナ語とロシア語を混ぜて話すときに生じている身体感覚とそれをめぐる感情がそれに当たる。

つぎに、社会行動分析の基準概念として「中庸」(メソテース, μεσότης, mean, the intermediate)があり、さらに「知性」(intelligence)の階層(ヒエラルキー)を把握する概念として、1)直観知(νοῦς, ノース, intuitive and just-understanding), 2) 思慮(φρόνησις, プロネーシス, prudence, practical judgements), 3) 知恵(σοφία, ソピイア, knowledge of a higher kind, wisdom), 4) 知的認識(διάνοια, ディアノイア, διά+νοῦς, ディア+ノース, the intellect), 5) 思考(βούλευσις, ブーレウシス, thinking, thought), 6) 熟慮(εμβουλία, エウブーリア, deliberative thinking), 7) 才能(τό δεινόν, ト・デイノン, talent), がある*。

*この階層秩序で言えば、「上智」(σοφία)は、上から3番目の知性ということになる。古代ギリシア文明を前提にする人間の教育は、そのひとつ上の階層である「思慮」(φρόνησις)を目指すべきであり、そこから古代インドのサンスクリット文明へと遡及することでユーラシア大陸の西と東の文明の統合を模索する者は、階層秩序の最上階である「直観知」(νοῦς)の層をまさぐることになるであろう。しかし、そこはすでに「神」の生息域である。

他方、「正しさ」を捉える概念には2種類あり、「適切さ」(τό ἐπιεικής, decency, the equitable)と「公平・公正さ」(τό ὀρθον και τό δίκαιον, ト・オルトンとト・ディカイオン, the right and the just/fairness)がある。そして、「思慮に基づく正しさ」が「倫理的な卓越性」を生み出すという「複合的性格」は、「純粋に人間的なもの」である。

また「欲望」(ὄρεξις, オレクシス, desire)の3つの位相として、1) 願望(βούλησις, ブーレーシス, wishes), 2) 情動(ἐπιθυμία, エピチュミア, appetites), 3) 激情, 気概(θυμός, チュモス, emotions, spirit), を区別する。そして、心(こころ)と身体(からだ)の諸実践の最も基本的な原則としては、やはり「快樂」(ἡδονή, ヘドネー, pleasures)と「苦痛」(λύπη, リュペー, pains)を措定し、社会的な諸実践の目標であり「人間に固有のはたらき(=生理的機能)」(τὸ ἔργον, ト・エルゴン, human working, function)として、また人間の社会的諸実践に「伴われるもの(=付随物)」(the survenient)として「快適さ, 気持ちのよさ, 清々しさ」(τὸ ἡδὺ, ト・ヘーデュ, fine pleasure)を想定している。

5) 「心と身体の状態としての都市研究」から「立ち居振る舞いとしての都市の研究」へ

「心と身体の状態としての都市」は、以下のように構成されている。

まず、「心と身体の状態」(プシュケーとソーマ, ψυχή και σώμα, mind and bodyの状態)は、すでに述べたように「感情」(パトス, πάθος, affection/feeling: 羞恥心 ή αιδώς は、ヘクシスではなくパトスである)と「潜勢(在)能力」(デュナミス, δύναμις, capability)と「振る舞いあるいは行動性向」(ヘクシス, ἔξις, disposition or state)の3つから構成されている。それをロゴス(λογος, reasoning, 真なる論理的秩序)との関係で示すと、以下ようになる。

0) は心と身体の基本要素であるが、1)～3)は欲望(オレクシス, desire)を構成する基本要素であり、4)は心や身体の論理的根拠を示すロゴスを示している。順を追って説明していこう。

つぎの0) aから0) cは、心と身体の基本な構成要素であり、すべてロゴスを含んでいる。

- 0) a. 感情, 愛情, 情熱 (パトス, affection, feeling, passion) : 有ロゴス
- 0) b. 潜在能力 (デュナミス, capability) : 有ロゴス
- 0) c. 振る舞い (ヘクシス, disposition, state) : 有ロゴス

つぎの1)～3)は「欲望」(オレクシス)を構成する基本要素であり、2)の情動は、一般にはロゴスを含んでいない。一方で、3)の「激情あるいは気概」は、最新のアリストテレス研究を通じて、ロゴスを含むものであることがわかってきている*。

- 1) 願望 (プーレーシス, willing, wishes) : 有ロゴス

- 2) 情動 (エピチュミア, appetites, 食欲, 性欲, 飲酒欲) : 無ロゴス
ただし, 欲望 (オレクシス, desire) 全体としては, 「抑制され習慣化された情動」として「ロゴスをともなう振る舞い」が存在している。
- 3) 激情, 気概** (チュモス, emotions, spirit) : 喜び, 悲しみ, 快楽, 苦痛, 恐怖, 矜持等 : 有ロゴス***

* Yazici, A. (2015) Aristotle's Theory of Emotion, *Turkish Studies*, Vol. 10, No. 6, pp. 901- 922. また, 「欲望」(オレクシス)には「相反するもの」(ト・エナンティオン)が「付帯的な仕方で」(カタ・シュンベベーコス)対立運動的に関わっており, その相反するものの「中間」(ト・メソン)が力の方向性であり, 「目標」(テロス)である。それは「善」(ト・アガトン)を目指している。(ἴσως δὲ οὐδ' ἐφίεται τὸ ἐναντίον τοῦ ἐναντίου καθ' αὐτό, ἀλλὰ κατὰ συμβεβηκός, ἢ δ' ὄρεξις τοῦ μέσου ἐστίν : τοῦτο γὰρ ἀγαθόν, 1159b19-21)

**プラトンは有名な「魂の三分説」において, この「気概 (チュモス)」を, 「理知 (ロゴス)」「欲望 (エピチュミア)」とともに, 人間の魂 (心) の機能のひとつに数えている。プラトンの「魂の三分説」においては, 「チュモス」は「気概 (spirit)」「激情, emotion,ではなく), 「エピチュミア」は「欲望 (desire)」「情動, appetite,ではなく)と, 伝統的には訳され, 理解されている。

*** 「空間の生産」という住宅調査の理論的なフレームワークで言えば, 1) ~ 3) をふくむ「欲望」は「表象の空間」を構成している。そして, この「表象の空間」は, 実際には商品の身体的選択によって構成される「ライフスタイルの空間」(伝統-階層的 [hierarchical], 近代-個人主義的 [individualist], 脱規範-理念主義的 [egalitarian], 無縁-孤立主義的 [isolated] 空間)である。伝統家族主義, 個人主義, 理念的平等主義は, 互いに両立しがたい組織原理である。他人と関

わりをもちたくない孤立無援 (=オタク) 志向 (the isolated) を含めて、われわれはこれら4つのうちのひとつの文化を好む傾向がある。その意味において、「選好をもつ」(have a preference) ことは不可避であり、それは「身体感的に正しいこと」でもある。

ちなみに、preference (選好) というのは、pre (予め) refer (言及) されたものであり、πρό (前もって) αἰρέω (選び取られた) のものである。それは消費の世界における「選択性向」を示しており、人間の身体的技法の習慣化された適性 (right and proper disposition of bodily action) を表現している。

文化人類学者の二文字屋脩は、日本のホームレス研究のなかで、孤立無援志向の東京の新しいホームレスたちの一部に、タイ北部やラオスに暮らすムラブリ族 (Mlabris) が示す非定住 (nomadicな) 思考のライフスタイルにみられる自由奔放さと重なるところがあるのではないかと、斬新な問題提起をしている (2022年度地域社会学会第1回研究例会報告 (7/9) において。同編『トーキョーサバイバー』うつつ堂、2022年を参照)。

ところで、商品によって構成されるそのライフスタイルの背後には、「自然」に関するそれぞれ特殊な見方 (自然の神話, myths of nature) が存在している。「表象の空間」は、自然に対する「神話の空間」でもある⁽¹⁶⁾。また、3) に0) aと1) がくわわると、「欲動」(たとえば「死の欲動」(Todestrieb, destrudo, death drive) のような) が構成される。それは、上記の整理にもあるように「有ロゴスの世界」である。それはおそらく、「欲動を代表する表象としての無意識」(Das Unbewußte, フロイト) あるいは「前ロゴスのな世界」と呼ばれるものに関係している。

人間としての活動の端緒には「欲望」(オレクシス, desire) と「知性」(プーレウシス, thinking) があるが、「欲望」があって「知性」が発生するのであり、「欲望」はまた「感覚」(アイステーシス, sense-perception) や「感覚の対象」への「愛着」(アイステーセオン・アガペーシス, loving for sense and sensual

object) があって初めて生じるのである。したがって、人間の動機の根源は、「感覚の対象」への「愛着」すなわち「皮膚感覚」(bodily affections) に存在する。この「愛着」あるいは「皮膚感覚」に対して、対象物は「表象」されたり「思惟活動の対象」になったりすることによって、自らは動かずに他を動かしている。「自ら動かずに他を動かすもの」は、人間や事物の卓越性としての善(アガトン)あるいは自然本来の機能(エルゴン)である。他方、「他を動かすとともに自ら動かされるもの」は、「欲望する能力」(ト・オレクティコン)のことある。この「欲望する能力」が、人間の対象的な活動にロゴス(=言語的および非言語的である真なる論理的秩序)の契機を持ち込むのである。一方では教育の成果として、他方では習慣づけの効果として。

ちなみに、日常の空間的な諸実践が実際の「行為実践」(プラークシス)になるためには、それがなんらかの「ロゴスをともなう現実の活動」(エネルゲイア)でなければならない。単純に反射的で直接的、具体的な行動は、「場所的な運動あるいは移動」(ポラ)を表現しているに過ぎない。ICT技術の利用(たとえば、Zoom, Skype, FaceTime)など「移動(モビリティ)増大の時代における身体的拡張」を議論する場合には、この点の理解が重要である。

人間としての活動の根源が「欲望」と「知性」にあり、「欲望」がなければ「表象」が「表象活動」へ、さらには「思惟活動」すなわち「知性認識」へと展開しないことに関しては、アリストテレス『魂について』第3巻第10章433a9, a21を参照。ここでは、都市や地域に住むという行為における「表象の空間」は、「欲望の空間」でもあることの認識が重要である。「空間的な(=物質的な)諸実践」は反復とつながっているとされる。たとえば、宇波彰は、伝統芸能や運動などにおいていわれる「体で覚える」ということは、「理性(ロゴス—岩永の挿入)の知らない反復」によるものであり、それこそが「シニフィアン(記号表現、意味するもの—同前)の優位」の実践であると述べている(宇波, p. 78)。また、フランスの精神分析家ジャック・ラカンは、「精神と身体の関係」を「ロゴスの

主体」と「欲望の主体」という対立で関連づけているが、宇波の「理性も知らない反復」もラカンの「欲望の主体としての身体」も、本論の立場から言えばじつは「ロゴス的なもの」であり、「ロゴスをともなった身体性向」（ヘクシス・メタ・ロゲー）である。この点は、岩永（2022）を参照。

ところで、感覚が備わっているところには、「快樂」（ヘドネー）と「苦痛」（リュペー）あるいは「快いもの」（ト・ヘーデュ）と「苦しみ」（ト・リュペーロン）が存在し、それらが存在するところには「欲望」（オレクシス）もまた存在している。なぜなら、「快いものとは欲望それ自体である」（トゥ・ヘーデオース・オレクシス・ハウテー， desire is an appetite for what is pleasant, W. S. Hett, 414b, pp. 80-81）からである。

ちなみに、欲望（オレクシス, desire）を構成するものとしての、日本人にとっての恥の心は、「ロゴスに従った激情あるいは気概」と理解することができる。この意味で、ルース・ベネディクト『菊と刀』における「恥の文化（日本の文化）」対「罪の文化（西洋文化）」という二分法は再考されるべきであり、「恥の文化」は古代ギリシア文明における「恥あるいは羞恥心」（*ἡ αἰδώς*）の概念と同様、「ロゴスを伴う（一に従った）激情あるいは気概」と理解すべきであろう。「恥を知れ！」（“Shame on you！”）という言葉は、ユーラシア大陸の東西において文明論的に同じ位相をもっているのである。

最後に、以下の4）は、心や身体の論理的根拠を示すロゴスそれ自体を示している。

- 4）思考（ブーレウシス*、thinking and thought）：ロゴスそれ自体であり、言語的あるいは非言語的な、身体的社会行動を意味している

*〈思考〉(ブーレイシス, βούλευσις) と 〈願望〉(ブーレイシス, βούλησις) という、似て非なる古典ギリシア語の関係について少し説明しておこう。「思考」(ブーレイシス)は、「相談する, 計画する」の〈中動相〉動詞「熟考される」(ブーレイオマイ, βουλεύομαι) (「相談し／相談される」「計画し／計画される」, したがって再帰的な動詞)に由来している。したがって, 「思考の徳(=知性的卓越性)」(ディアノエティケー・アレテー, virtue of thinking) というのは, ログスの卓越的な作用そのものである。一方, 「願望」(ブーレイシス)は, 「望まれる」(ブーロマイ, βούλομαι) という, やはり再帰的動詞の名詞形で, 「ロゴスをともなう欲望」を意味している。

こうして, 「心と身体の状態としての都市」の研究は, 「再帰的な習慣をふくんだ社会行動」の研究となり, 「立ち居振る舞い」の研究へと移行する。「多くの人の集まり(人口密集)のなかでどのように振る舞うか」の研究になってくるのである。最近広く話題になっている「道徳の危機」をめぐる問題は, SNS利用による「再帰的な習慣をふくんだ社会行動」における「身体活動の持続性の危機」の問題であり, 「心と身体の状態としての身体性向の危機」の問題である。

ところで, 「立ち居振る舞いとしての都市」の研究にも, 基本的な諸概念が存在する。まず, 「身体性向」(こころとからだの性向, bodily hexis) には, 人間の対象的行動と真理の探究のために必要な3つの要素がある。第一に「感覚知」(アイステーシス, αἴσθησις, 感覚-知覚, 愛着, sense-perception), 第二に「直観知」(ヌース, νοῦς, 知性, intuitive and just-understanding—直観知の卓越性は, アリストテレスも指摘するように, 「肉体から離れた独立的な性格を持つ」ところにある⁽¹⁷⁾), 第三に「欲望」(オレクシス, ὄρεξις, desire), である。

人間の知性には, 以下のような位階秩序が存在している。まず, a) 「直観知

「ヌース (νοῦς)」が最上位にあり、つぎに2)「思慮-プロネーシス (φρόνησις)」がくる。「正しきロゴスを伴う倫理的な卓越性」(エーティケー・アレテー・メタ・トゥー・オルトゥー・ロゲー)は、「思慮」(プロネーシス)に基づいている。さらに3)「知恵-ソピイア (σοφία, knowledge of a higher kind, wisdom)」が存在し、それから一般的な4)「知(性)的認識-ディアノイア (διάνοια, διά+νοῦς, intellect)」がある。最後に、「目標・目的」(テロス)によっては善くも悪くも機能する5)「才能-ト・デイノン (τό δεινόν)」が位置づけられる。

人間の知性的卓越性を構成する「思考」(ブーレウシス, βούλευσις, deliberation, consultation)には、下のような7つの成熟段階が存在している。8つ目、すなわち「思考の頂点」(アクロス)は、世俗的で人間的な知性を離れた「神性なもの」としての「直観知」(ヌース)であるが、これも「憑依行為」などとして実際には人間の社会に存在している。

しかし、われわれの多くは「神」としては生きないのであるから、「唯一絶対の自然本性」を生きるのではなく、「複合的で総合的な自然本性」(τὸ σύνθετον, composite nature)をまさに「純粋に人間的なもの」(the purely human)として生きている。ここに「人間的な自然」(human nature)の本来的な性格があり、またアニメや漫画の影響を通じた日本文化のグローバルな貢献(多神教的な世界観によって表現される「思いがけなさ」(contingency), 「多数性」(multiplicity), 「多声性」(polyvocality)などポスト西欧近代的な諸要素による)がある。キリスト教導入以前の原ウクライーナ文化も同様であり、現在でもウクライーナでは、ギリシア正教化された儀式や祝祭のなかにその原ウクライーナ文化の多神性をポスト西欧近代的な諸要素として確認することができる。これは、東方正教会の典礼を実践するカトリック(ユニエイト教会)が表現する文化の複数性(二元性)とは別のものである。

人間の「振る舞い」における知的な成熟側面を再整理すると、以下の通りで

ある。

- 0) 現象 (パイノメナ, φαινόμενα, 現前, appearances) : 意識の日常的な現れ
- 1) 思い込み (ドクサ, δόξα, 謬見, 臆見, beliefs) : 一般に人が考えているもの
- 2) 社会通念 (エンドクサ, ἐνδοξα, 共通信念, social or common beliefs) : 影響力のある知識人に共通の考え方
- 3) 信仰 (ピステー, πίστι, 信念, faith, creed, belief) : 宗教者による信仰告白
- 4) 推論的把握 (ヒュポレープシス, ὑπόληψις, supposition, 思念, 見解, 仮説, 判断性向) : 科学的な根拠を想定した研究者の見解
- 5) 深い思考 (プーレウシス, βούλευσις, 思索, thinking, deliberation, consultation) : 優れた研究者による真実を穿った見解
- 6) 熟慮 (エウブーリア, εὐβουλία, 深慮, deliberative thinking) : 深い思索と優れた判断の融合
- 7) 思慮 (プロネーシス, γνώμη, 知慮, φρόνησις, prudence) : 優れた判断と熟慮された政策的思考の実践*
- 8) 直観知 (ヌース, νοῦς, 神性, intuitive and just-understanding) : 肉体から遊離した優れた直観的理解あるいはインスピレーション**

* 「倫理的卓越性」は「感情」(パトス)と不可分の関係にあるが、「思慮」(プロネーシス)も、「倫理的卓越性」(エーティケー・アレテー, 性格あるいは人柄の徳)に対して密接な連関を有している。すなわち、「思慮」の「端緒」(アルケー)は「倫理的卓越性」にあり、「倫理的卓越性」における「ただしさ」(オルトス)は「思慮」に基づいている。そして、繰り返し述べるが、「倫理的卓越性」というものは、唯一者としての神ではなく、「複合者-総合者」(τὸ σύνθετον, composite or synthetic nature, 複合的自然本性)にかかわる卓越性であり徳である。この「複合者-総合者の卓越性」こそが、「人間に特有の卓越性」(ἀρεταί

ἀνθρωπικά, purely human) にほかならない。

** 「思考」の8つの成熟段階のうち、「空間の生産」という「住宅調査（たとえば、空き家・空き店舗調査）の理論的なフレームワーク」において「空間の表象」を構成しているのは、3）～6）である。3）が入るのは、たとえばスコラ哲学の専門用語が実際にはゴシック建築物（教会など）の建築設計用語になっているばあいである（パノフスキー⁽¹⁸⁾を参照）。6）は、時代の最先端の知恵が個別建築物と都市計画の総合として表現されているばあいである。また、「空間の生産」は、「社会関係」（家族、仕事関係、友人関係、まちづくりのボランティア関係など）の実現を含んでいるので、「空き家」（あるいは「空き地」）であっても「記憶（過去）における潜勢（在）能力（デュナミス）としての空間の生産」や「希望（将来）における完成された姿（目標、テロス）としての空間の生産」が社会的に実践されていると考えるべきであろう。

最後に、「欲望」（オレクシス, ὄρεξις, desire, 欲動：psychological and bodily desire, 心理的および肉体的欲望/psychological and bodily pleasure, 精神のおよび肉体的快楽）を構成する「3大要素とロゴスの関係」について、重要なので、もう一度ここで整理しておこう。

「欲望」を構成しているのは、第一に「願望」（プーレーシス, βούλησις, 切望, willing, wishes：psychological desire), 第二に「情動」（エピチュミア, επιθυμία, 情欲, appetites：psychological and bodily desire), 第三に「激情」（チュモス, θυμός, 憤激, 気概 [プラトン流〈魂の三次元〉理解の復活=日本的なものの再解釈へ], emotions, spirit：Anger, 怒り, Fear, 恐怖, Pity, 憐れみ, Sadness, 悲しみ, Fine Pleasure, 気持ちよさ, Pride, 自尊心, etc：psychological and bodily desire), である。このうち、第一の「願望」（willing, wishes）と第三の「激情」（emotions, spirit）はロゴスを持っている。すでに述べたように、

最近のアリストテレス研究はそのことを端的に示している。それらに「思考」(thinking) が正しく接続される (= 正しい目標をもつ) と、「熟慮された欲求」(deliberate desire) になる。しかし、正しく接続されないと「熟慮されない= 誤った欲望」(not-deliberate desire) として表現される。

さて、「よき友人関係」というのは「心と身体のよき状態」のことであり、「身体的に健康な感情」(σωματικά) のことである (Friendship is a good disposition or state of mind and body, good bodily affections.)。また、「よき友人関係」(friendship and loving) の基礎には、1) 「道徳善」(goodness, 人柄のよさ virtues of character), 2) 「快樂善」(pleasure), 3) 「有用善」(utility) の3つがある⁽¹⁹⁾。一方、「市場」の形態をとっている社会行動には「必要な買い物をする行為」と「買い物を楽しむ行為」があるが、前者は「有用善」の実現であり、後者は「快樂善」の実現である。そこに人が交われば、ともにそういうものとして「友人関係」(friendship) を構成している。たとえば、「朝市」は「有用善」と「快樂善」、そしてとくに地域づくりのために行なわれるものは「道徳善」(goodness, virtue, 人柄のよさ、その意味における類似性^{ホモイオテース}であり平等性^{イソテース}) を基礎にしている。そこには、社会的な分業における社会的効用 (friendship-based-sociality) と経済的効用 (interest-based-sociality) の混交が存在している。

まちづくりや地域づくりそれ自体は、「道徳善」を構成している気高き (decentかつnobleな) 第一次的社会目標であり、「公共善」(public goods) である。なぜなら、まちづくりや地域づくりの「技術」(統治術としてのテクネー) は「支配的な-棟梁的な-技術」であるからである。一方、「朝市」や「ええもん市⁽²⁰⁾ (= 楽市)」は「有用善」であり「快樂善」であり、「支配的な技術に従属する技術」であり、気高く快適でかつ健康で文化的な第一次目標の重要な構成要素である。モールやスーパーマーケットも、「有用善」や「快樂善」を

的確・公正に実現している限りにおいて、同じ「公共善」を構成する重要な要素である。

以上の意味で、友人関係とはコミュニティであり、「コミュニティとは友人関係」なのである (A community is friendship or loving)。友人関係とは「人と人を結びつける人間の互恵的な愛」(ピイリア, Φιλία)なのである。キリスト教で言う「隣人愛」もイスラーム教で言う「同胞愛」も、この「互恵的な平等性」(reciprocal equality)という意味において正しい。

たとえば、キリスト教(西欧)でいう古典古代の文芸復興は、イスラーム教において受け継がれ解釈されていた古代ギリシア語文献の収奪とその再解釈(「再発見」)の結果=成果であるが、明治学院大学が掲げる「Do for others」(「あなたがして欲しいと思うことを、あなたの隣人にもしなさい!」)という、「プロテスタント」化(すなわち、言語-テキスト理解に一元化)されたキリスト教の信念体系は、じつは13世紀に中世のカトリックに持ち込まれた古代ギリシア哲学(とくにアリストテレス『ニコマコス倫理学』第8、9巻における「友人関係、友愛(ピイリア, Φιλία)」論)の再解釈にすぎない。そこでは、対人関係、相互行為論的な想定のもとで、「相手に好意をもち、お互いの善を願望し、そしてお互いがそれらのことをよく知っている」ことが、よき友人関係(=友愛)の定義になっている。それは「互恵的な平等性」(アンティペポントス, αντιπεπονθός, reciprocal equality or equality in exchange)を示しており、「自己愛(self-love)がそのまま他者への愛(altruism: love to the other)に繋がる」(πρὸς δὲ τὸν φίλον ἔχειν ὡσπερπρὸς αὐτόν (ἔστι γὰρ ὁ φίλος ἄλλος αὐτός), he is related to his friend as he is to himself, since the friend is another himself, Irwin, trans., third ed., p. 168, 1166a 31-32)ような相互行為, 社会的な相互交換である。そこでは、友人は「もう一人の自分自身あるいは第二の自己(second-self)」になっている。

コミュニティというのは、以上のような友人関係の繰り返しの互恵的な活動の実現（エネルギー）によって生み出される「振る舞い＝行動性向」（ヘクシス, behavioral hexis）である。その芽＝端緒（アルケー）は、それぞれの個体に最初から実現可能な未来（エンテレケイア）として埋め込まれている。

だから、そこではひとは「自己に対して最も親愛なるもの」⁽²¹⁾であり、そしてその意味において「友人とは第二の自分」であり、「異なる自分」でもある（ἕτερος γὰρ αὐτὸς ὁ φίλος ἐστίν, 1170b6, for his friend is a second self—Rackham, p. 565, since a friend is another himself—Irwin, third ed., p.177, since the friend is another self—Sachs, p.177）。他人の善を悲しむことは、自分の善を悲しむことであり、そこに「コミュニティ」は生まれえない（諸感情の分析に関しては、とくにアリストテレス『弁論術』を参照）。他人の善を願望することは、自分の善を願望することであり、そのようにしてコミュニティが出来上がるのである。他者を愛することは自分を愛することであり、「自己愛」（self-love）があってはじめてその目線で他者に対する「友人関係」も成立してくる。「自己愛」は決して「わがまま、身勝手さ」（selfishness）ではなく、また「自己保身」でもない。「他者愛」（altruism）であり、「自分を大事にするように他人を大事にする行為」の「第一歩」なのである*。

*道徳哲学者のアダム・スミスは、「自己愛」（self-love = pleasure of self-approbation, The Theory of Moral Sentiments, p. 276）にもとづき「性格、よき人柄」（virtue of character, goodness）を前提にした「友人関係」（ピイリア, friendship and love）論を『道徳感情論』の基礎に据えたが、その後、古典経済学者としてのアダム・スミスは、「功利、有用性」（utility, usefulness）を前提にした「友人関係」（interest-based-sociality）論を基礎に、「市場（＝社会的分業）」と富の蓄積に関する分析を行い『諸国民の富』を著した。その二人のアダム・スミスの間には、「快楽→快適さ→公正なる美しさ（＝都市の美学）」（pleasure→the pleasant→the

fine, εἶναι κάλλιον τοῦ αὐτὸν πράξει τὸ αἴτιον τῷ φίλῳ γενέσθαι. it may be nobler for him to be the cause of his friend's performing it than to perform it himself, Rackham, p. 557, 1169a34-35) を前提にした「友人関係」と「公正なる中立的観察者」(エピエイケース, impartial spectator) を論じるアダム・スミスが存在しうるし、前2者(道徳哲学者—virtue, goodness—と古典経済学者—utility—)との関係が問題になりうるが、そこは哲学や心理学の領域でもなく、また経済学やそれに関連する政治学の領域でもなく、文字通り「振る舞いの社会学」や「まちづくりの社会学」を論じる社会学者アダム・スミス(共同性—community—論)の領域になるであろう。すなわち、「多様な形態の公正(δίκαιον, just)な市場」が「自律 = 自足(αὐτάρκεια, autonomy = self-sufficiency)」と「快適な共同性に向かう態度(κοινωνία, community)」を構成する場面を研究する学問の領域になるであろう。これは、K.ポランニーが「アリストテレスの社会学」として理論的に再発見していた領域である。しかし、この領域は日本においても、大道安次郎、米林富男ら社会学者によって既存のスミス研究のなかですでに予感されていたものでもある。

スミスは、つぎのように言っている。アリストテレスによれば「徳とは正しき論理的根拠(オルトス・ロゴス)に従った中庸の習慣」(the habit of mediocrity according to right reason)であり、また「節制的かつ正しき感情」(moderate and right affections)にあるのではなく、むしろ「この節制(ソープロシュネー)の習慣」(the habit of this moderation)である。そして、プラトンの主張に反対してそれが「実践的な習慣」(practical habits, ヘクシス・メタ・ローゲー)であると彼が言うとき、アリストテレスはつぎのような意見をもっていたと思われる。スミスは指摘している。すなわち、「公正になされるべきこと、あるいは避けるべきことに関する、正しい感情とロゴスに基づく判断が、最も完全な徳を構成するに唯一十分なものである」(『道徳感情論』第7部第2篇第2章)。

原文は、'just sentiments and reasonable judgements concerning what was fit to be done or to be avoided, were alone sufficient to constitute the most perfect virtue.' (Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Sixth Ed., 1790 (2005), Sálvio Marcelo Soares, p.248) プラトンは、徳は「ある種の知識」(a species of science, エピステーメー)であると言っているが、一方、アリストテレスは徳は「実践的な感情の習慣」であり、「公正＝適切さ(エピエイケイア, what is fit to be)に基づく正しい感情とロゴスを持った判断」であると言っているように思われると述べている (ibid., pp.248-49)。ここに『ニコマコス倫理学』第8～9巻の「友人関係、友愛、ピイリア」論における「自己愛」(self-love)の議論が結びつくとき、アダム・スミスの『道徳感情論』における議論の本来の焦点が浮かび上がってくるのである。

スミスにとっての「道徳感情」(moral sentiments)とは、「感情理性(ロゴス)」(ヘクシス・メタ・ロゲー, rational bodily affections, sense of propriety)なのである。それは一面で、「市場関係のなかに浮かび上がる共同性(コイノーニア)」を表現しており、他方で非言語的で適正な社会的行動を含みこむ「思慮」(プロネーシス, practical judgements)の「働き」(エルゴン, working)を示している。そして、この意味において「道徳感情はなによりも自己愛でなければならない」(ὁ σπουδαῖος φαίνεται ἑαυτῷ τοῦ καλοῦ πλεόν νέμων. οὕτω μὲν οὖν φίλαυτον εἶναι δεῖ, the good man takes the larger share of moral nobility for himself. … it is right to be a lover of self., 1169a35-69b2, Rackham, p. 557)のである。その「自己愛」の中心には、「公平・中立な観察者」(impartial spectator)がおり、それが「自己」(アウトス)に向き合うのみならず「他者」(アッロス・アウトス—もうひとりの自分—あるいはヘテロス・アウトス—異なる自分—)に向き合うとき、それは「友人関係」(ピイリア)を形成した「共同態」(コイノーニア)を形成して、最終的には「市民的な友愛関係」(ヘー・ポリティケー・ピイリア)を形成するに至るのである。

そして、それはスミスにとっては同時に、「オリンピック・ゲーム」のように「うるわしきもの（ト・カロン）＝卓越性を求めるような市場競争」（a market as moral competitions）でなければならなかった（1169a8-10）*。

*Iwanaga Shinji and Takahashi Harutaka (2022) *Nicomachean Ethics and the Classical Dimension of Smith's Theory: In Pursuit of the Honorable and Noble, 'to Καλόν,' as a Market Morality*, Working Paper at the Conference of 'Market Morality, Globalization, and Income Inequality,' at the IMERA of Aix-Marseille Université, France, held on November 22 and 23, 2022.

この「うるわしきものを求める市場競争」を、現代的な文脈において「買い物客（＝消費者）」の観点から考えると、「それぞれが自分にとってよい異なる目標（テロスとしてのト・カロン）を目指す全体としての競合」すなわち「文化的事業かつ道徳的な競合」（moral and cultural competitions）になる。すでに述べたように、メアリー・ダグラスはこの「競合する目標」のなかに、「個人主義的（individualist）目標」、「伝統家族主義的（hierarchical）目標」、「理念平等主義的（enclavist and egalitarian）目標」、「無縁孤立主義的（isolated）目標」（「オタク指向」と言ってもよいだろう）という4つのライフスタイル目標を抽出している。ここで「伝統家族主義的目標」は、他のすべての目標と対立している（Douglas, M.(1997), p. 19, pp. 26-28）。

この文脈で、「快適なもの」（τὸ ἡδὺν, ト・ヘーデュ, the pleasant）とは「現在の活動」（actuality of the present）であり、「未来への期待」（hope of the future）であり、「過去についての記憶」（memory of the past）である。そして、これらのなかでもっとも快適なものは、「現在の活動」であり、それはもっとも「愛すべきもの」でもある。したがって、まちづくりや地域づくりに向き合

う「振る舞いの社会学」としては、目の前の課題に向き合い活動することがより大事であり、さらに未来について共に語ることが大事であり、また共に過去を振り返ることが大事である。

「振る舞いの社会学」にとっては、「気づき」だけではなく、「振り向くこと」の実践がとても大事である。これはきわめて身体的な実践であり、そこにはアングロサクソンのかつ人口密集が生み出す都市的性向である「振る舞い」(pretending)の再考も含まれるかもしれない。同時に、「饗宴=振る舞い」(エレウテリオテース, ἐλευθεριότης, generosity, 気前のよさ)における実践も大事である。これは他人に対する財貨の取り扱いにおける倫理的卓越性(人柄=性格の卓越性あるいは徳)を表現している。

6) 「振る舞い (=行動性向, ヘクシス) の社会学」における実践形態

「振る舞い=行動性向の社会学」研究のフィールドワークにおける実践的な活動形態として、「まちづくり, 地域づくりの社会学」(sociology of community empowerment)が存在している。それは、伝統的な都市社会学がそうであったように、現状を調査し、分析して、そこに欠けているものを単に指摘、評価するだけではなく、そこにまだ存在しているものに固有の可能性(エルゴン, ἔργον, はたらき)をあらためて見出し、停滞しているその活動の残されている可能性(デュナミス, δύναμις, 潜勢力, 潜在能力)とさらなる発展の道筋を示し、地域社会や都市の全体としての将来における完成形態を、それを担う個人に固有の完全なる発展の形とともに探し出し、提案し、ともに実践して「将来の姿を創り出す社会学あるいは開華の社会学」(Sociology of ευδαιμονία, flourishing)である。

それはマイナス思考の記述, 分析中心の社会学ではなく, 提案・構築型の「ポ

ジティヴな社会学」(positive sociology)であり、「人間の幸福にかかわりそれを創出する社会学」(sociology of and for happiness)でもある⁽²²⁾。「あなたがいる場所でも他の場所でも友人と共にあなた自身の華を満開にする(=自然本性の機能を本来の完成目標へと導く)社会学」である。それは「自己愛の社会学」(sociology of self-love)である。同時にそれは、物、事柄、自然、動物、人間などすべてにおいて、それらの「本性的に快適なことがら」(φύσει δ' ἡδέα, naturally pleasant), すなわち「健全な本性に基づくはたらきの遂行を刺激するようなもの」を意味している*。

*「本性的に快適なことがら」とは、「付帯的な仕方においてではなく快適であることがら」であり、「付帯的な仕方において快適である」とは、「治療的な意味を持つ快適なもの」を意味している。アリストテレスは、この点についてつぎのように述べている。

αἱ δ' ἄνευ λυπῶν οὐκ ἔχουσιν ὑπερβολήν : αὐταὶ δὲ τῶν φύσει ἡδέων καὶ μὴ κατὰ συμβεβηκός. λέγω δὲ κατὰ συμβεβηκός ἡδέα τὰ ἰατρεύοντα.... φύσει δ' ἡδέα, ἃ ποιεῖ πράξις τῆς τοιαύσδε φύσεως. (1154b15-21, Rackham, p. 446)

Pleasures unaccompanied by pain, on the other hand—and these are those derived from things naturally and not accidentally pleasant—do not admit of excess. By things accidentally pleasant I mean things taken as restoratives ... Those things on the contrary naturally pleasant which stimulate the activity of a given nature. *ibid.*, p. 447.

Rackhamは、この最後の文にある「与えられた自然本性の活動を刺激する〈自然本性的に快適なものthe naturally pleasant〉」に注釈をつけている。「それはあらゆる振る舞い(ἔξις) すなわち行動性向(disposition),あるいは能力(faculty)の活動を刺激するものであり、その自然本性的な状態(in its natural state)に

あるものであり、その自然状態への能力の回復 (restoration of a faculty to its natural state) を刺激するような快樂とは対照的なものである。」(ibid., p. 446, note b)

人間が幸福であるためには、「自律」(アウトアルケイア, αὐτάρκεια), すなわち 1) 自足していること (self-sufficiency), 2) 自分をコントロールできていること (self-governance), 3) 完全に独立していること (full independence) が必要である。しかし、それはコミュニティのなかにおいて、したがって友人関係のなかで可能になるものである。まちづくりは、出会いと交流の場所づくりである。そして、まちづくりは出会いと交流の場所づくりであるが、そのなかでの友人関係づくりでもある。さらに、自律した身体的実践としての人間の幸福は、とりわけ魂 (=心) の活発な活動のなかにあるとあってよいだろう。

さて、人間の幸福 (ευδαιμονία, flourishing) を政策的に創出するためには、具体的には、以下の4つの「自律 (あるいは自立)」支援サービス提供の実践が必要になるだろう。第一に、外的な資源 (external goods) に対する支援、すなわち生まれもった不利益 (disadvantages) を少なくすることへの支援、富 (財産) 形成への支援、社会的地位や名誉へのサポート、多くはないが豊かな友人関係の維持に対する支援、第二に、身体的 = 肉体的な資源 (goods of the body) に対する支援、すなわち健康、身体的な美しさ (アンチ・エイジング)、強壮 = フィジカルな抑制力 (エンクラテイア) などの維持への支援、第三に、内的な自律・自立 (アイデンティティ, goods of the soul) への支援、これには二つあり、一つは「倫理, 道徳的な自立支援」であり、もう一つは「知的な自立支援」である。

最後に、幸福を最終的に実現するための支援と実践があり、個別に幸福につながる現実の活動を維持する支援と実践、また「全体としての幸福」の実現を支える支援と実践が必要である。そこでは、静かで深い思索 (テオーレイン)

と学び（マントネイン）を深める喜び・悦びが、「幸福の目標」であり、また超高齢社会における「生涯学習の目標」である。

高齢者の多くが「社会的に孤立している」（河合克義⁽²³⁾）のは、その「振る舞い」が現代の幸福の条件であるメディア環境に接続していないからである。「ひとり空間」（南後由和）の増加は、「社会的孤立」の増加ではない。若者は、「ひとり」であっても、「孤立」してはいない⁽²⁴⁾。そこには、「蓮の根茎状に広がる振る舞い（＝身体性向）」（rhizomatic bodily-hexis）が存在している。こうした社会的条件を前提にして、超高齢社会において多様な世代に「人間の幸福」が創出される「自律支援サービス」を実現していく必要がある。

7) 「振る舞い（＝行動性向, ヘクシス）の社会学」は「都市の美学」の研究である

「振る舞いの社会学」は、「行動性向の実践的な諸形態としての都市環境」の経験的な研究であり、それは「都市の美学」の研究でもある。そして、「都市の美学（＝美的感覚）」（Aesthetics of the City）の研究は、「都市を生きる感覚知」（αἴσθησις, Aisthēsis=Sense-perception of the City）の研究であり、それは、研究の最終局面として「都市の〈政治的な〉感覚（＝社会的な統治術）」（Sense-perception of the Polis - City-State）の研究でもある。それは、『ニコマコス倫理学』から『政治学』へと展開されたアリストテレスのまなざしのうちにかつてあったものであり、「見る-見られる、あるいは意味する-意味される関係」としての「都市のドラマトゥルギ-」（吉見俊哉*）以上の、「空間の身体的な諸実践」（すなわち、「知る-知られる、聴く-聴かれる、匂う-匂われる、食べる-食べられる、触れる-触れられる、購買する-購買される、渡す-渡される、喜ぶ-喜ばれる、楽しむ-楽しまれる、悲しむ-悲しまれる、苦しむ-苦しめられるなど、総じて感じる-感じられる、振る舞う-振る舞われる関係」を問題

にしており、「個人的かつ社会的な諸実践の身体的空間の総体」を問題にしている。

これらは「人間の実践的な活動それ自体」(エネルゲイア)であり、「人間の活動の完成された姿態」(エンテレケイア)である。だが、「実践的な活動」には、「身体的な動きをともなうもの」(キネーシス, 運動)と、「身体的な動きをともなわないもの」(アキネシア, 無運動)が存在している。そして、「身体的な運動をともなわないもの」にも「悦びは付随する」のであり、それは日本のわび、さびや禅仏教における瞑想にみられるように、「寂靜(じやくじょう)」(古典ギリシア語で、エーレミア)という名前を持っている。それは日本文化一般における「わび、さびの美学」にも繋がっている。

また、ICT技術を通じて拡散しているWeb上の人の繋がりや「社会的なもの」の維持・形成局面にも、「身体的な動きをともなうもの」と「身体的な動きをともなわないもの」が混ざり合った「実践的な活動」と「活動の完成された姿態」が、偶発性(contingency)、多数性(multiplicity)、多声性(polyvocality)をもって表現されている。それは、文字通り「現われの空間」(space of appearances)となって、「人としての友人関係」と「市民としての友人関係」を紡ぎ出している。

*吉見俊哉(1987)『都市のドラマトゥルギー—東京・盛り場の社会史—』弘文堂。この研究の基本視角「上演論的パースペクティブ」がベースにしているアービング・ゴッフマンの「ドラマトゥルギー」論の基本的な問題点に関しては、A.マッキンタイア(1993)『美德なき時代』(みすず書房, pp.141-144)を参照。マッキンタイアはこの本のなかで、人間の卓越性としての行為(アレテー, ἀρετή, ラテン語訳の意味を継承している現代語としてはvirtueすなわち徳)は、ただひとつの特定のタイプの、ある状況における成功を導く振る舞い(=行動性向disposition)ではないとして、ゴッフマンの「相互行為の社会学」の基礎に浸潤

している特殊な道徳哲学（あるいは人間観）を批判している。マッキンタイアによれば、問題は近代における道徳の断片化にあり、それは近-現代的な自己性（modern selfness）と相即の関係にある。

そこでは、他者のまなざし（regard）に対する「自己呈示」の重要性が、ひとつの、そしておそらく唯一の中心的な主題として出てこざるを得ない。ウクライーナ系カナダ移民の家系で育ったゴッフマンがアメリカで描写した社会的な世界は、歴史を2400年以上遡れば、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』のなかですでに拒絶していた、「人間にとっての善は名誉（ティメー, τιμή, honor）の所有にある」ような社会的な世界なのである。実際、すでに述べたように、われわれの「人間性」（human nature）はもっと多様で複雑な幅をもっている。

「振る舞いの社会学」は、「知らぬ振りの社会学」すなわち「市民的な無関心」（civic inattention）の社会学であり、その「慣れ=状態=行動性向」の社会学である。また、能や歌舞伎の「舞い踊り」の社会学であり、モダン・ジャズダンスやチャリーダーの「集団舞踏」の社会学でもある。

たとえば、「知らぬ振りの比較社会学」を实践してみよう。通りすがりに日本では「遠慮会釈もなく」と陰口を叩く人がいる。しかし、ドイツには「遠慮も会釈も（知らない人同士の世間話も）ない」。だから、西洋中世史家の阿部謹也は、ドイツから帰国して日本には「世間」があることに驚いている*。イギリスには「（ジェントルマンの）遠慮はあるが（自分から）会釈は（し）ない」。フランスには「（謙遜に基づく）遠慮はあるが（自らを蔑む）会釈はない」。イタリアには、「（躊躇する）遠慮はあっても（控えめに触れ合う）会釈はない」。スペインには、「（サンチョ・パンサ的な）遠慮があり（騎士道的で儀礼的な）会釈がある」。

*阿部謹也（1995）『「世間」とは何か』を参照。ドイツで歴史資料研究で図書

〈振る舞いの社会学〉を素描する

館通いに明け暮れ、阿部が本来的に「世間知らず」であったかどうかは知らないが、少なくとも日本に帰国して「世間に気づく」ほどには「世間知らず」であったことの、個人的な告白とも読める論文である。ドイツでの阿部の「日常的な振る舞い」は、日本では奇妙な「振る舞い」になったということであろう。しかし、ヨーロッパを広く見渡すと、「世間」を気にしない個人主義的なドイツ人の「振る舞い」の方がむしろ奇妙であり、独特である。けっして普遍的でも一般的でもない。

一方、アメリカには、「(建前上の) 遠慮はあるが(出会いを待つ) 会釈はない」。中国には「(客人に対する) 遠慮はあるが(謙讓が出会いを導く) 会釈はない」。ロシアには「(見せ掛けの) 遠慮はあるが(控えめな) 会釈はない」。しかし、ウクライナには、「(コザーク的な-農民的な) 遠慮がありときに(優しく丁寧な) 会釈もある」。総じて言えば、「遠慮も会釈もあるのが当然」と考えるのは、きわめて日本的な社会的=空間的な距離の取り方、あるいは「振る舞い(=行動性向)」(ヘクシス)なのである。

「振る舞いの社会学」は、日常生活においては「身振り、手振り」といったノンバーバル・コミュニケーションの社会学(たとえば、「ものいわぬ〈農民〉の社会学」)であり、鎌や鋤やスコップで田畑で農作業をする「土地労働=身体運動」の社会学であり、またフィットネスクラブにおける「ホットヨガやピラテスの実践」の社会学でもある。

旅館を出るときに「布団を畳まないと気持ちが悪い習慣」は、「振る舞いの社会学」の重要な分析対象である。また、2022年5月23日(月曜日)白金台の八芳園におけるバイデン大統領への、宮城県名取市からの「ジェラートの振る舞い」も、その政治的あるいは象徴的な意味において日本文化の現在をめぐって社会学的分析の対象である。どちらも、身体感覚と心の感情の間にある、ある習慣化された振る舞い(=行動性向)を物語っている。

「振る舞いの社会学」は、とりわけ人間の感覚対象に対する愛着と、そこから生まれる「知りたいという欲求」に関心の中心がある社会学である。そして、社会階層的には、そこに「差別化された悦びの感情」や「差別化された悲しみの感情」を把握する社会学である。それは意識された／意識されない貧困の実相にも繋がっている。「振り」は「知らぬ振り」「袖振れあい」の振る舞いであり、一方「舞い」は「舞い上がり」「舞い踊る」の振る舞いである。

また、「表舞台と裏舞台の関係の逆転」という意味における「振る舞いの変化」もみられる。それは、たとえば「リモート・インタビュー」の推進にみられるような、コロナ禍における社会調査活動にも現れている。明治学院大学社会学部社会学科の岩永ゼミでは、2021年7月16日の金曜日9:30a.m.から11:15a.m.まで、千葉県君津市商工会議所上総事務所2Fで立ち上げたZoom教室で、君津市役所からのまちづくりの現状と課題に関するプレゼンを各自宅から集まって学生が聴き、また市役所の職員に質問をした。

君津市役所から展開された、目の前のネット上のZoom教室内のプレゼンテーションが、「表舞台」になったのである。君津市役所、商工会議所上総事務所、学生の家庭の部屋は、同時に「裏舞台」になった。参加者の身体は、パソコンのスクリーンを前にして「蓮の根茎状に拡がって活動」したのである。この場合、スクリーンの手前までが「身体」ではない。その先のネット上に現れたvoice（声）、posture（姿勢）、gesture（身振り）、facial expression（顔表情）などもすべて「拡張された身体」なのである。

「表局域＝表舞台」（front region/stage/step）と「裏局域＝裏舞台」（back region/stage/step）と「遮断域＝楽屋」（cut-off region/stage off）の関係の〈変化＝逆転〉は、南後由和が気づいている以上に、明確にしかも拡大しつつ生じている。「メディア化されたひとり空間」では、「ネット＝メディア空間」が「表舞台」になり、「場所としての物理的空間である部屋」は「裏舞台」、あるいは「遮断域＝楽屋」になっている⁽²⁵⁾。

いずれにせよ、そこに現れる「感情」には3つの側面があり、1) cognitive (ブーレイシス的)なもの、2) desiderative (オレキシス的)なもの、3) affective (パトスのあるいはアイステーシス的)なもの、である。そして、「場所性の美学」としての「都市の美学」は、1)ではなく、2)と3)に基づくものであり、それは心と身体が相互作用する局面であり、「心と身体の状態としての都市」(the city as a disposition or state of mind and body)研究の中心である。しかし、現在、人間や物、情報、貨幣などの流動性が高まるなかで「場所運動(ポラ, φορά*)の種的な差異化」が多面的に生じており、それにともなって「ロゴスに従った感情行動」(ヘクシス・カタ・トン・オルトン・ロゴン)が「状態としての共同性」の基礎になって至る所に出現している。それが、とりわけネット上で、「場所への参入」(territorialization)と「場所からの離脱」(de-territorialization)を繰り返している。

以上のような関心において「振る舞いの社会学」は、心と身体、物と自然の性向の「集まりの社会学」であり、またそうした〈集まりの性向〉としての都市についての社会学でもある。いずれにせよ、都市とは現在、「偶発的で、多数的で、かつ多声的な諸要素の集まりの性向」(the hexis or dispositions of contingent, multiple, and polyvocal assemblage)なのである。

*この古典ギリシア語は動詞φέρω(ペロー、運ぶ, bring)から派生した言葉で、アリストテレス『ニコマコス倫理学』のなかでは接頭辞付きの動詞として、συμφέρω(シュンペロー、共に運ぶ, bring with)という語がよく使用されている。アリストテレスの「共同体」(κοινωνία, コイノーニア, community)論においては、「共に運ぶ」という身体的実践が共同性の成立にとって重要な原理になっている。同時に、身体的実践の対象としての「共通のもの」(το κοινόν, ト・コイノン, commons)の存在も、不可欠の条件になっている。そして「共に運ばれたもの」(το συμφέρον, ト・シュンペロン, 相互共益)は都市(ポリス)的共同

体が生まれた最初のきっかけであったとも言っている（加藤訳『ニコマコス倫理学』 p. 272）⁽²⁶⁾。

8) 都市問題あるいは都鄙問題の深層について—地域とは何か—

都市と農村、都会と田舎のあいだには独特の問題がある。それは「身体的な感覚」の問題であり、ある対象に向き合ったときに、他の人なら同じ条件で当然持ち合わせる感覚を持っていない「状態＝行動性向」（ヘクシス）の問題である。そこにはすでに述べたように、「差別化された悦びの感情」や「差別化された悲しみの感情」が存在している。それは「相対的剥奪感」以上の身体感覚の問題である。農山村民や島嶼民が大都市にやって来てまず感じるものがこれであり、他方、大都市の有閑マダムが「お上りさん」に見出す振る舞いの「粗野あるいは無作法さ、もの知らなさ」への眼差しもこの感覚に基づいている。それは、農山村民や島嶼民の身体感覚（bodily affections）から見れば「振る舞いのぎこちなさ」（ブルデューがピレネーの村落で見出したもの^{(27)*}）の問題であり、客観的にはある種の「人間としての豊かさ」を表現していることも多いが、大都市の住民から見ればそれが「貧しさ」に映る。

*ブルデューはこの著作のなかで、農民のぎこちない歩き方や、都会から来た女性と上手く身体の動きを合わせて一緒に踊れないという「身体技法の問題」を提起しており、そこに「社会空間（espace social）を表象する象徴空間（espace symbolique）」の存在を指摘している。宇波彰は、その最後の著書『ラカンの思考』の第3章「かたちが意味を作る」において、ラカンの「シニフィエをつくるのは、シニフィアンです」という言葉を引きながら、ブルデューが言う「象徴空間（あるいはシンボル空間）」とは、「記号表現・シニフィアンの領域」のことであり、ブルデューは歩き方や踊り方における身体の使い方（＝かたち）にそれが表象

されるとみただと指摘している。身体の使い方（=かたち）が農民の意識に影響しているとみているのである。⁽²⁸⁾

ラカンの「シニフィエ（意味されたもの）をつくるのは、シニフィアン（意味するもの）です」という表現を正確に読むと、すでに言及した吉見俊哉の「都市のドラマトルギー」論が問題にできていない身体的-空間的な諸実践の領域もあきらかになってくる。また、この地平から、「表象の空間」という概念が「意識現象・記憶・表象・感覚・知覚・知的認識・思考・判断・熟慮・思慮・直観知」の水準へと開かれなければならない、「空間の表象」という概念との接合領域における実践や主体形成のモメントもそこに見出されることになるという、アンリ・ルフェーヴルの「空間の生産」論の革新の見通しもでてくるのである。

大都市には山の手と下町がある。たとえば、白金台は山の手であり、深川不動は下町である。山の手への通りは広くてすっきりとしている一方で、下町の通りは狭く入り組んでいて、路地を抜けたところには神社仏閣の広場がある。それは親しみの空間であると同時に、狭い拘束の歴史文化的空間でもある。たとえば、月島の魅力である路地はそこに暮らす人びとの濃密な生活の意味空間である。だが、それはノスタルジーの空間でもあり、そのノスタルジーの反対側には別のもっと豊かで近代的な生活空間が出現している。下北沢における小田急線の地下化によって地上駅周辺から消え去った風景も、同じ戦後、昭和へと続くノスタルジックな空間である。

ところで、島嶼部や中山間地域であれ、東京、ニューヨーク、パリ、ロンドン、ベルリンのような大都市の都心部であれ、「地域」とは「地域（とくに土地への関わりを含んだ人間関係）への愛着」に他ならず、より一般的には、人間であれ自然であれ、対象に触れているという愛着を通じた「知るという根本的な欲求」への渴望と充足をめぐる「身体的な感情」(bodily affections)にはほかならない。その第一の身体感覺的な境界は、「風景（視覚）」および「言葉や

音（聴覚）」である。そして「風景」は、ロゴス（論理的秩序）であるが、言葉ではない（ロゴスはいつも言葉ではない⁽²⁹⁾）。さらに、視覚や聴覚を通じて身体器官に訴えかけるものほど、印象深いものはない。ここに「感情ロゴス」という領域が成立してくる。

それは、ときに言語化されたものとして意識され、またときに言語の背後（裏側）にあるもの（das unbewußte Verhalten）として意識されずにいるが、たしかに機能している。そして「言語化されたもの」も、「言語の背後にあるもの」も、ともに「ロゴス的なもの（＝論理的な秩序）」を持っている。ちなみに、「言語の背後にあるもの」は「前ロゴス的なもの」（das unbewußte Sein）と表現することができ、それは「向ロゴス的なもの」（ブーレーシスとチュモス）と「反ロゴス的なもの」（エピチュミア）に区別される。そこには「欲動の力学」における「中間の存在」（ト・メソン）と「相対するものの存在」（タ・エナンティア）を想定することが可能である。

9) 「振る舞いの社会学」は「まちづくりの社会学」であり、「よき振る舞いの社会学」は、「よき友人関係づくりの社会学」である

「一緒に何かをする」（ト・シュンベロン, bring with, have a shared activity）ということと、それによって「ともに時間を過ごす」（シュンディアゲイン・メタ・アッレーローン, spend time together, 他者と一緒に見分ける・解決する）ということが、「生を共にする」（ト・シュゼーン, living together）ということの本来の意味であり、その場合に必ずしも「同じ家に住む」（具体的な場所を共有する）必要はない。そしてそれこそが「友人関係（＝友愛）」（ピイリア, friendship and loving）の本来の意味でもあり、したがって、「友人関係」とは具体的な場所の有無にかかわらず「生を共にすること、一緒に〈生きる〉こと」なのである。それは「共にある＝共同存在」（ホミイリア, a being

together) という古典ギリシア語が意味するものにも近い。

そこには三つの原則がある。1) 対人的な関係において相手に好意 (エウノイア, goodwill) を抱いていること, 2) お互いに相手に善 (タガトン, the good) の実現を願っていること, 3) お互いがそのことを知っていること, の三つである。そして, 相手に実現を願望する善にはまた三つあり, 1) 卓越性 (あるいは徳) のあるよき振る舞い (= 人柄) の実現, 2) 身体および心における快樂または快適さ (気持ちのよさ) の実現, 3) 相手に不足しているものを補い合う互いの自己充足 (アウトアルケイア, autonomy, self-fulfillment) ー 経済的交換 (= 市場, interest-based-sociality) あるいは相互分与 (お裾分け, friendship-and-love-based-sociality) を通じて一, がその三つである。こうして「自他すなわち自分と他者の合同」が発生し, 「共同体指向の態度」(コイノニア, κοινωνία, community) が生成し, まちづくりのプロセスが出現する。⁽³⁰⁾

以上が「まちづくりの課題」であり, 「地域づくりの目標」になっている。

ところで, 「友人関係」は「感情 (= 友情)」のように見えるが, そうではなくて「行動性向, すなわち心と身体の内的小および外的な振る舞いの状態」である (Friendship and loving seems to be a feeling, but actually a disposition and state of mind & body.)。そして, 「友人関係」というのは「心と身体のよき状態」のことであり, たんなる「感情」ではなく, 「ロゴスを伴った身体的な感情」(σωματικά, rational bodily affections) のことである (Friendship is a good state of mind and body, rational bodily affections.)。

「よき友人関係」には小規模の範囲が適しているが, 市場をめぐる「有用性にもとづく友人関係」はもっと大きな規模の共同体を成立させることができ, 一方, 「快適さにもとづく友人関係」においては友人双方から同じ利益がもたらされ, 「共通の事柄」(ト・コイノン) に同じ悦びを感じており, もっとも広い範囲において共同体を成立させることができる。「共に生きることを選ぶ友人」は, したがって「快適な友人」でもあり, それがもっとも広い共同体 (コ

〈振る舞いの社会学〉を素描する

イノニア)を構成する。いずれにせよ、友人関係というのは「心と身体のよき状態」のことであり、「身体的な感情」(σωματικά)のことなのである。

そして、それは将来、「振る舞いの社会学」から「ふれあいの詩学=袖振り合うポイエーシス(制作)の学」へと飛翔することであろう。

10) 「振る舞い(=行動性向, ヘクシス)の社会学」における実践的研究領域

—現在の研究テーマ群—

「振る舞いの社会学」における実践的研究領域を、箇条書き的に書き留めれば、研究の現段階においては以下のようなになるだろう。もちろん、これ以外にも、今後拡大展開していく研究領域が数多くある。

- a. 官僚制の研究—とりわけ「都市の官僚制」の研究
- b. 音韻論的二重言語問題の研究—とくにウクライナ人アイデンティティに関する研究
- c. スーパーシティの展開と地域への愛着の変容に関する研究—都市の再開発に関する研究
- d. 身体的な愛着における社会的区別=差別化の研究—社会的階層に関する研究
- e. 言語発話行為と集まりの構造化に関する都市社会および地域社会に関する研究—友人関係の発現とその非構造化に関する研究
- f. 趣味愛好品の社会・空間的な構成に関する研究—芸術および美的感覚の諸法則に関する研究
- g. 快楽・快適原則の自己実現に関する研究—買い物行為(Shopping Experience)の社会学的研究

h. 空き家の所有形態とその現実的な利用可能性に関する研究

むすびにかえて

「ふるまいの〈詩学〉」(坂部恵)の抽象性とその限界を超えて、「振る舞いの〈社会学〉」を経験-実証科学的に展開するには、いまだ多くの課題が横たわっている。理論的には、「かたりの〈詩学〉」に対して「かたりのない〈社会学〉」が課題になるであろう。なぜなら、たとえば、日本人は「語らなくても振る舞っている」からである。「ものいわぬ農民」(大牟羅良)はじつは多くを語っているのであり、「多くを振る舞っている」のである。それは、エリザベス女王が公的な場面(public space)において饒舌にならないのと、同じ「身体的な社会性向」を表わしている。「振る舞いの社会学」は、イギリスの言語哲学者J. L. オースティンに反対して、「非言語(ではあるがロゴス)の遂行性」を「振る舞い=コミュニケーション」のリアリティとして把握したいと思っている⁽³¹⁾。

その社会学は、西欧近代によって特権的に語られてきた「人間性」(human nature)をその狭隘さから解放するプロジェクトでもある。その意味において、この社会学は「ポストモダンな社会学」でもある。「袖振り合うも多少の縁」の社会学なのである。同時に、S.フロイトの抽象的な「死の欲動」を否定する、実践的な「快樂原則の此岸」(Diesseits des Lustprinzips, pleasures of mutual sympathy)の社会学でもある。

心と身体との区別、「形而上的なもの」と「形而下的なもの」の実質的な近代科学における区別は、デカルト『方法序説』以降のものである。しかし、その形式的な区別は、すなわち「形而上的なもの」(ロゴス, λόγος, 理知, reason とチュモス, θυμός, 気概, spirit), 「形而下的なもの」(エピチュミア, ἐπιθυμία, 情動, appetite = bodily desire and bodily pleasure)という区別は、プラトン以降のものである。この「心(=魂)の三分説」はよく知られているが、プラ

トンはすでに「チュモス」(気概=激情, spirit, resentment=emotions)を人間の心の重要な身体的機能と認めていた。

しかし、まず、私はここで、私のこれまでの都市社会学における研究および地域社会学における研究が行き着いた地点(トポス)から再出発せざるを得ない。その再出発は、都市社会や地域社会研究における「身体論的な研究への転回=展開」を意味している。そして、その学問的な出発点は、「知る」ということの基礎にある「身体器官(=皮膚感覚)における対象への愛着」(ト・アイステーティコン)以外にない。その場合、眼に入り込むものへの愛着が第一であり、耳に入り込むものへの愛着が第二になる。味覚、嗅覚あるいは触覚への愛着が、現代の消費社会においては重要になるが、ホットヨガやお遍路巡りなどの普及を考えると、全身体的器官の運動からもたらされる第六感的な感覚(神性への直感)も重要な研究対象になってくるだろう。この最後の感覚は、社会学において伝統的な研究主題である「聖なるもの」あるいは「スピリチュアルなもの」への探究にも繋がっている。

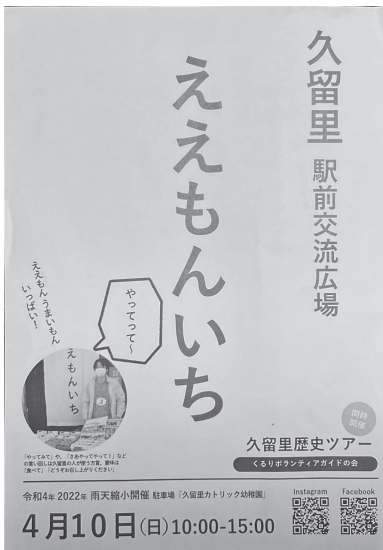
社会行動と「言語-非言語行動」(ロゴス, reasoning)の関係が、「身体」を通じて「感情」(パトス, affections, feeling)や「激情・気概」(チュモス, emotions, spirit—Spirit aids reason.)とどのような関係にあるのか、さらには心や身体の「潜在能力」(デユナミス, capability)と「振る舞い=行動性向」(ヘクシス, disposition and state)とどのような関係にあるのか、その探究は今後も、都市社会や地域社会の現場で続いていくことになるであろう。

註

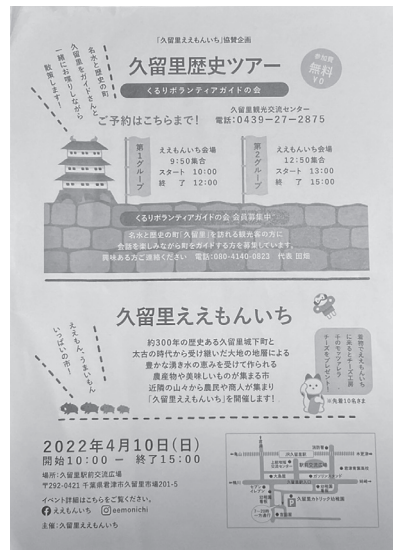
- (1) この歴史的な転換期の表層と深層に関しては、岩永(2013), pp. 272-73を参照。
- (2) Півторак, Г., 2001, p. 134.
- (3) Шевченко, Т., 2003, Сон.
- (4) *Demographia World Urban Areas 17th Annual Edition (2022)* (<http://www.demographia.com/db-worldua.pdf>, p.21)を参照(2022年11月15日閲覧)。

〈振る舞いの社会学〉を素描する

- (5) 「文化的な振る舞い」と「生物学的な振る舞い」の区別に関しては、岩永真治 (2022) 「〈ヘクシス〉の社会学における研究対象について」明治学院大学社会学部社会学科編『社会学とはどのような学問か』Web完全版, pp. 3-10を参照。ミラーニューロンの共機能性向に関しては浅野孝雄・藤田哲也 (2010) 『ブシューケーの脳科学—心はグリア・ニューロンのカオスから生まれる—』産業図書を参照。
- (6) Douglas, Mary (1997) In Defence of Shopping, pp. 17-18.
- (7) チョーサー (西脇訳) 『カンタベリ物語』ちくま文庫, 下巻, 53頁。
- (8) アリストテレス (高田訳) 『ニコマコス倫理学』岩波文庫, 1156a 2-27。
- (9) プラトン (加来訳) 『ゴルギアス』同上, 479B。
- (10) 同上 (高田訳) 『ニコマコス倫理学』同上, 1174b33-34。
- (11) アリストテレス (神崎訳) 『ニコマコス倫理学』岩波書店, p. 411。一部訳を変更した。
- (12) 同上 (神崎訳), pp. 411-12。
- (13) 同上 (高田訳), 1153a13。
- (14) 同上 (高田訳), 1153a14。
- (15) 同上 (高田訳), 1153a9-25を参照。
- (16) Thompson et al, 1990.
- (17) 同上 (高田訳), 1178a22。



資料 1



資料 2

〈振る舞いの社会学〉を素描する

- (18) パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』を参照。
- (19) 山本芳久『トマス・アクィナス』を参照。
- (20) 千葉県中房総の城下町久留里のイタリアンレストランが主催するボランティア市場(資料1, 2を参照)。
- (21) (高田訳)『ニコマコス倫理学(下)』, p.131。
- (22) 心理学の領域には, 'positive psychology'という領域が存在している。その現代的な展開としては, とりあえずマーティン・セリグマン(2014)(宇野カオリ監訳)『ポジティブ心理学の挑戦—〈幸福〉から〈持続的幸福〉へ—』ディスカヴァー・トゥエンティワンを参照。
- (23) 河合克義(2009)『大都市ひとり暮らし高齢者と社会的孤立』を参照。
- (24) 南後由和(2018)『ひとり空間の都市論』における議論を参照。南後も, 「ひとり空間」がメディアに対して開かれていることを示唆している。
- (25) 岩永真治(2022)「対面行動の社会的変容について—一感情理性(ヘクシス・メタ・ロゴス)主義宣言—」(明治学院大学社会学・社会福祉学会編, Socially, No. 30所収)を参照。
- (26) この脚注は, アリストテレス(1973)(加藤信朗訳)『ニコマコス倫理学』における解釈をベースに書かれている。
- (27) ブルデュー, P. (2002/2007)を参照。
- (28) 宇波彰(2017), pp. 75-76を参照。
- (29) 宗教的な—キリスト教的な—意味においても, 「はじめに言葉があった」のではなく, おそらく「はじめに真なる論理的秩序(λογος)があった」というのが, 古典ギリシア語における本来の意味であるだろう。ちなみに, 古典ギリシア語では, 名詞ロゴス(λογος)の動詞レゴ(λέγω)の半分は, 非言語的な身体活動を意味している。その主要な意味の半分は, 1) put in order, arrange, gather, 2) choose, count, reckon, で非言語的であり, 他の半分は3) say, speak, 4) call, name (usually in the passive voice)であり, 言語的なものである。
- (30) 『ニコマコス倫理学』第8~9巻の「ピイリア(友愛, 友人関係)」論を参照。
- (31) オースティン, L. (2019)(飯野勝已訳)『言語と行為』講談社学術文庫。

参考・参照文献一覧

阿部謹也(1995)『「世間」とは何か』講談社現代新書。

浅野孝雄・藤田哲也(2010)『ブッシュケーの脳科学—心はグリア・ニューロンのカオスから生まれる—』産業図書。

Aristotle (1957) *De Anima*, W. S. Hett, trans., Harvard University Press (Loeb Classical Library).

- Aristotle (1926) *Nicomachean Ethics*, H. Rackham, trans., Harvard University Press (Loeb Classical Library).
- Aristotle (2009) *Nicomachean Ethics*, J. Sachs, trans., Focus.
- Aristotle (2019) *Nicomachean Ethics*, T. Irwin, trans., (third ed.), Hackett Pub Co Inc.
- アリストテレス (1971/73) (高田三郎訳) 『ニコマコス倫理学 (上・下)』岩波文庫。
- アリストテレス (1973) (加藤信朗訳) 『ニコマコス倫理学』(旧版 アリストテレス全集 第13巻) 岩波書店。
- アリストテレス (2014) (神崎繁訳) 『ニコマコス倫理学』(新版 アリストテレス全集 第15巻) 岩波書店。
- アリストテレス (1992) 『弁論術』岩波文庫。
- ベネディクト, ルース (2005) 『菊と刀』講談社学術文庫。
- Bourdieu, P. (2002) *Le Bal des célibataires*, Édition du Seuil. (2007 『結婚戦略—家族と階級の再生産—』藤原書店)。
- チャーサー, ジェフリー (1987) (西脇順三郎訳) 『カンタベリ物語 (上・下)』ちくま文庫。
- Douglas, Mary (1997) 'In defense of shopping,' in Falk, P. & Campbell, C. (ed.), *The Shopping Experience*, Sage.
- Дзюба І. М. (1998) *Інтернаціоналізм чи русифікація?* — К.: Видавничий дім "KM Academia."
- Freud, S. (1915) *Das Unbewußte* (「無意識について」中山元訳『フロイト, 無意識について語る』光文社 (古典新訳) 文庫所収)。
- 石黒ひで (1986) 「認識としての感情」哲学会編『哲学雑誌: 情念と意志』第101巻773号所収。
- 岩永真治 (2013) 『グローバリゼーション, 市民権, 都市—ヘクシスの社会学—』春風社。
- 岩永真治 (2022) 「対面行動の社会的変容について—感情理性 (ヘクシス・メタ・ロジー) 主義宣言—」明治学院大学社会学・社会福祉学会編, *Socially*, No. 30所収。
- Iwanaga Shinji and Takahashi Harutaka (2022) *Nicomachean Ethics and the Classical Dimension of Smith's Theory: In Pursuit of the Honorable and Noble, 'to Καλόν,' as a Market Morality*, Working Paper at the Conference of 'Market Morality, Globalization, and Income Inequality,' at the IMERA of Aix-Marseille Université, France, held on November 22 and 23, 2022.
- 河合克義 (2009) 『大都市ひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社。
- MacIntyre, A. (1981) *After Virtue: A Study in Moral Theory*, University of Norte Dame Press ((1993) 『美德なき時代』みすず書房)。
- 南後由和 (2018) 『ひとり空間の都市論』ちくま新書。
- 二文字屋脩編 (2022) 『トーキョーサイババー』うつつ堂。

- 大牟羅良 (1958) 『ものいわぬ農民』 岩波新書。
- オースティン, J. (2019) (飯野勝己訳) 『言語と行為』 講談社学術文庫。
- パノフスキー, アーウィン (2001) 『ゴシック建築とスコラ学』 ちくま学芸文庫。
- Півторак Г. (2001) *Походження українців, росіян, білорусів та їхніх мов. Міфи і правда про трьох братів слов'янських зі «спільної колиски».* — Київ: НАНУ, Академія.
- ポランニー, カール (2003) 『経済の文明史』 ちくま学芸文庫。
- プラトン (1967) (加来彰俊訳) 『ゴルギアス』 岩波文庫。
- Шевченко, Т. (2003) *Зібрання творів: У 6 т. — К. — Т. 1: Поезія 1837-1847.*
- セリグマン, マーティン (2014) (宇野カオリ監訳) 『ポジティブ心理学の挑戦—〈幸福〉から〈持続的幸福〉へ—』 デイスクヴァー・トゥエンティワン。
- Smith, A. (1982) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Vol.1-2, Liberty Fund ((1996) (大内兵衛訳) 『諸国民の富』 岩波文庫).
- Smith, A. (2011) *The Theory of Moral Sentiments*, Penguin Classics ((2014) (村井章子・北川知子訳) 『道徳感情論』 日経BP社).
- Smith, Adam (1790/2005) *The Theory of Moral Sentiments*, (sixth ed.), Sálvio Marcelo Soares.
- Thompson, Michael, Ellis, Richard and Wildavsky, Aaron (1990) *Cultural Theory*, Boulder, CO: Westview Press.
- 宇波彰 (2017) 『ラカンの思考』 作品社。
- 山本芳久 (2017) 『トマス・アクィナス—理性と神秘—』 岩波新書。
- Yazici, A. (2015) Aristotle's Theory of Emotion, *Turkish Studies*, Vol. 10, No. 6, pp. 901-922.
- 吉見俊哉 (1987) 『都市のドラマトゥルギー—東京・盛り場の社会史—』 弘文堂。

謝辞: ようやく自分なりにオリジナルな社会学の構想を示すことができるようになった。ここに至るには多くの先達に励まされた。またその助言や教示に導かれてきた。とりわけ、平凡社「これからの世界史」シリーズの編者や著者には、いま思えば格段の扱いを、海のものとも山のものともつかないかけ出しの研究者に対してしていただいた。廣松渉、加藤哲郎、いいだもも、溝口雄三、喜安朗、伊藤誠、三木亘、平田清明の諸氏には、シリーズ刊行の研究会において、私を一人オーディエンスにするようなかたちでそれぞれの報告を拝聴させていただき、また私の研究関心に個別に丁寧な答えていただいた。いま思えば、夢のような個人授業の連続であった。すでに故人になられた方も含め、ここに記して感謝の意を表したい。